



無責任

第二集



問いかけ 浮島

わたしは二月の霧の中へ去りたい

とあなたは言った

ぼくにとつて

願いとよぶには淋しすぎる問いかけだった

川べりにかかる橋に

そいつはぼうつと

甘くかかった

(見て、)

(タチツボスマイル、)

黒装束に身を固め

ぼくたちは参列した

水辺に

真つ暗な夜の霧、

踏みしめる腐葉土、ため息の風景に

(くるしく)

むつびあう

あなたはそつと歩をとめて

あなたの影をさしだした

なぜだ

ぼくたちみたいなの藍色が

硬貨となって放られる

(わたしは向こうの霧へとかえる)

川よ ぼくだけが賽を投げよう

お前はあまりにもあんまりな問いかけだ

チンチロリンそれでも少し進
音はく
人生が空転する
になる時
嫌
が
数
裏
運命を立方体で占うと七
側
は
決
し
て
見
て
し
め
せ
ぬ
は
な
ず
の
に
誰
も
が
見
抜
き
誰
も
が
笑
う
目
の
ユ
メ
ど
り
着
け
な
い
清
水
ら
く
で
ん
で
行
け
る

キャベツ好きなの

清水らくは

雨の中でも温かいのは
一人でも楽しいのは
キャベツがあるから
それが真理だから

「キャベツ好きなの？」

「葉っぱがいいの？」

「芯までいいの？」

「死ぬほどいいの？」

「キャベツ好きなの」

「キャベツがいいの」

「芯でもいいの」

「生きていたい」

飛んで太陽に向かうよりはここでこうして眠っていたい
さなぎの心は苦しいから幼い夢に戻ってきたい
永遠よりも三分先に知らない幸福待っているから
それまでひたすらキャベツ食べてる

「キャベツ好きなの？」

「葉っぱがいいの？」

「腐ってもいいの？」

「何よりいいの？」

「キャベツ好きなの」

「キャベツがいいの」

「それは嫌なの」

「当たり前なの」

「キャベツ食べてみる」

「キャベツ好きになる」

「君を好きになる？」

「君を好きになる」

「キャベツ食べてみて」

「キャベツ愛して」

「キャベツだけにして」



三月のキャベツ畑に霧ふかく眠れ失声症のアンドロイド

浮島

魚

海遊館からすべての魚が逃げ出しても
僕はこの廊下を笑いながら歩く
だってここは大阪だから
思い出をいくつも混ぜ合わせて
水槽の中に大海原を想像する

あの日天王寺の影に紛れていた
君の携帯ストラップは
どんな引出しにしまわれたのか
すっかり綺麗に墮落させられた通りを
フィッシュマンズ聴きながら駆ける

天地 せまくて
海風 けがれて
命が圧縮されても
沸き起こる怪しさが
ある限りは 限りは

日本橋で横道に誘われ
知らないねじに見とれている
そうかここは大阪だから
思いは全て加工されて
ねじくれた歴史に塗り込まれていく

清水らくは

その日わたしは梅田に行った

イケブクロはやたら上昇するのだが人は

ここでは潜っていった

空間のことを考える、ガラスの伸縮とはなにか

ケイ素の働き、立体的方位に潜在化していく心、もぐら

もぐらとは地下潜行するジュースサーバーで出会った

なにかあまいのを俺と飲んだ

「本当にあまいものは地上にはない。

お前たちはそれを思い出しているにすぎないのだ。

わたしはお前たちのアルファである」

哲学するもぐら

喫茶店もあまく、駅もあまく、人々のかばんがおおき

ただ地下にある本屋だけはセクシーだ

もぐら お前はと思う

ブティックも、旅行代理店も、保険屋も、靴の修理屋も潜った

かんとだきもオムライスもカレーライスも潜った もぐら

ゴザソウロウはあまい もぐら

「われわれは故郷を携行する、そして

トランクは地下へ潜行する」

流星が愛を運んだ幻は不知火湾の優しさだった

デコポンに一步足りない存在でデコポンよりも愛されてみる

天井へ駆け上がって瞬間に世界は一度ウイנקをする

両翼に不吉を全て抱え込み翔べ鵬よアジアの空を



不知火にとりのこされたないしよ子のしたたるように火めく唇

キュイン
キュイン
パ
パ
パ
パ



セブンデイズバツファロー

すごく優しくしたから
とても努力したから
突然死んだ僕は
神様をお願いをした
七日間でいいから
それだけでいいから
星を眺めるために
生き返らせてほしい

僕は牛になった
夜が来ると
星の瞬きが
本当に聞こえた

清水らくは

キュイン
キュイン
神様有り難う
限られた日にちの中で
大地は温かい

草木が生い茂るのも
雨が降り注ぐのも
花が咲き乱れるのも

星の音を聞くため
そのために夏はやってくる

キュイン

あと五日

キュイン

あと四日

今日は星が見えないので眠る

あと三日

キュイン

あと二日

キュイン

最後の夜は長く続いてくれ

キュイン

キュイン

キュイン

キュイン

キュイン

キュイン

キュイン

キュイン

キュイン

草の影

何枚も折り重なって、
影が腐れていくにおい
それをぼくは夏と名付けた

夏は光などではない
ぼくたちの願いなど
影に
ぬれてしまう

ベニアオイの蕾には
くちびる、という名をつけた
それは
たおれる女という意味で
水におちた光は
眼差しの内部から
彼女を焼死させた

風の中にも光はあつて
あまりにも眩しい味がする
ぼくは舌が焼けただれるのを恐れ
風よけの林を歩く

八月にはたましいがかるくなります水彩絵の具のあおになります



線香花火と金魚

祭りはもう終わったのか
子供たちは月を追い始めた
夏が溶けていく音は
いつだって空気を伝わらない

一年に一度この日だけは
ほんのわずかでも届くかもしれない
希望なのか絶望なのか
わからない印を求め続けて
ずっと木の根にしがみついている
僕は線香花火
この世で咲いたら
あの世で種になり
いつか芽が出るはず

迷い込み元に戻る音
駆け抜けていくついでに
誰かが捨てて行ったビニール袋
その中に黒い瞳
僕は見つけられた
少しずつ水が漏れ出て
魂を柔らかくする
狭間の世界で君は
どちらを選びたいのかな
水が抜けきっても
瞳には光があった

清水らくは

祭りはゆっくりと続いていく
僕たちは空間を歪ませて
夏を吸い込んだ
いつかは終わる
いつかはいつか

「プロパティの琥珀」(by 189BPM)に寄せて

・youtube <http://www.youtube.com/watch?v=N1B2c79nBss>
・ニコニコ動画 <http://www.nicovideo.jp/watch/sm18292914>

空転

清水らくは

太陽は裏切りがち／季節ごとに悪意を探して／言い訳を用意している／
時に運命は空転して／成功の種を芽吹かせる／それさえなければ／それ
さえ信じなければ 握りしめた琥珀を／離さない限り／幾度でも訪れる
／革命の期待／溺れては助けられ／繰り返す悔やみ／それでも道が見え
てしまう 神よ何故私を選ぶ／私よ何故それを尊ぶ／足よ何故折れぬ／
心よ何故涸れぬ／後ろを向いても道があるならば／それは前進にな
るのだ 朝から雨が降って／多くの嘘を流していった／二つほど町を越
えれば／誰も私を知らない／私は死んだと同時に生かさず／何度も復活
する／誰も気付かない差異を経て 誰かが私を指さし／不可思議な肩書
を叫んだ／私は無視もできたのに／立ち止まってしまった／逃げてしま
えばいいのだ／心は進言するが／魂は簡単ではない／言い訳はどこだ

火曜日は錬金術師

浮島

背の高い理髪師のいうところでは
潮風には質量があるとのことだ

ある画家は波の絵を描いた
彼の絵からは波の音がした
彼の絵には
ぼくたちの言葉と同じように質量がなかった

思うに

嘘というものには質量がない

肺のふかく、

鼻から抜ける

ぼくたちの音のひびきには

質量がないのだ

水滴には質量がある

だからぼくは

シトロンの皮を剥いた

氷水に浮かべるとそれは

海辺に住むぼくたちの呼吸になった

千九百九十九年 十二月三十一日、
あの日の夜 ぼくは世界が滅びる瞬間を夢見て
姉さんとともに夜更かしをしていた

畳の部屋から障子戸をあけて
硝子越しの夜空を見た

せかいは暗闇に満ちていた
みんな誰もが 心のどこかで終わりを願っていた

(ああ、もうすぐこの世がおわります)

結局なにごともないまま
ぼくは普通に中学を卒業した

いつのまにか
レコードプレーヤーの針は折れてしまつて
親父のもつていた井上陽水と
スザンヌヴェガは聴くことができなくなった

(ぼくが最後のかなしみでありますように)

高校三年の夏
大学受験を控えたぼくたちは
大人についての意味もたいして知らされないまま
生き続けることを急かされるように
8月の空を歩いた



一つのC

落波

今まさにC14が一つ減り一つのCも始まっていく

屋根よりも高く飛んでくもの全てこいのぼりへと変わってしまった

少年が青年になる瞬間にウオークマンの卵が割れた

泡のよう透明だった心にも諭吉の視線刺すほど快感

パソコンが太陽を向き祈ったら僕らの寿命あと一万年

オカリナ抱いて山から空へふみはずす作曲家の音楽理論

浮島

Evergreen

清水らくは

花言葉を作る仕事は

刑期を三日ずつ減らしていく

美しいものばかりとは限らない

とても毒々しくて

ほくそ笑む花びらに

全てを終わらせてもらいたい時もある

だから私は緑を求める

決して越えられない境界の向こう

生命は常に過剰だ

咲くことも散ることもない

草木の普段着を

どうして人は纏っていないのだろうか

例えばあの山が噴火して

空が灰色になったとしても

私は見つめ続けている

目に焼き付いた緑は

失われないうから

永遠に光は反射する

列車が一本通り過ぎて

新しい種を落としていく

花が咲くまでに

かんざしを見つけてやらねばならない

咲かねばいいのに

咲かねばいいのに

がっこうには二度といきたくないけれどあのアンテナの音がうるさい

月曜はわたしをさらいな先生がうさぎ殺しの罪をあばく日

ギロチンが下りるよ黒い靴下とはさみをもった着ぐるみたちに

冬の日のまつしろい咳もうすぐさいまラジオからさよならがくる

浮島



ヒトデナシのキグルミ

清水らくは

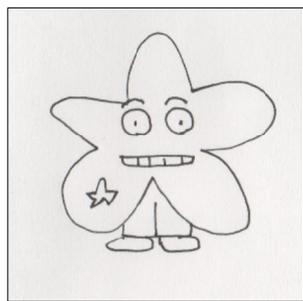
思い出の白い服は着れないから
青く染めよう
青空も好きだった少し嫌だ
赤く染めよう
夕日もよく見たっけな
黒く染めよう
そういえば夜は二人笑ってた
白く染めよう

新しい服ばかりが
部屋にたまつて
包まれるはずの自分自身が
どこかに行つてしまった
キグルミを作つてみるよ
できるだけ残忍に見えればいい
誰も近付かないような顔で
道の真ん中を歩くよ

見失われたままの自分だけど
キグルミはちゃんとまとえたよ
世界は少し小さくなつて
地平線をつかめそうだ
皆がとても急いでどこか行く
青空も夕日も気付かずに
夜の闇の黒の深さ
その中で魂の光見つけた

三年の月日が流れて
初めて優しい言葉をかけられた
聞き覚えのある声で
視界が不思議な方向に歪んだ

こんな姿をしているよ
心の中でささやく
実はもう二度と戻れないんだ
嘘くさく抱きしめて、笑った



ひとでなっしー 絵: らくは

嘘の成分

(年をかさねることは嘘をつくことだ)

星をみて宇宙飛行士はそう思った

(大気中に存在する

質量パーセント濃度二十一の

酸素を消費して

ぼくは必死に嘘をつく)

アルミシリカガラスと

溶融シリカガラス

それらをあわせた

まるい水槽の向こうから

彼は地球へ手を振った

(ハロー 植物性プランクトン

ハロー クリスマスイブの子供たち

良い新年を ぼくは元気さ どうせ月だ

酸素はないから嘘もない)

浮島

あけまして星屑

昨年を無事に殺せた暁になんとか届け謹賀新年

君達が幸せになる予定なら僕はそれを見守る予定

食材になりたくはない露の臺年始の挨拶少し遅めで

致死量の期待を背負う一年に夜逃げの業者紹介してる

本当は皆の笑顔好きだから雑煮の中に星屑落とす

落波

どうにか川からたちのぼる
朝靄が いま憧れを 遮った
だからぼくは
もうどこへもいかない

どうしてここらの田んぼには
音がない ただ自転車が あるだけだ
だから真鍮のベルだけが
もうたまらなくすべてになつた

いまここで声をあげなよ
だいじょうぶ
ぼくだけがいま水を見ている

不安なら川が持つてく
見てみろよ
ぼくのでさらに影が濃くなる

見知らぬ男三人がやむを得なく
一つの部屋に泊まることになり
何を語るべきか考えた末に
刺身の話題を選んだという

釣る人と食べる人と山の男が
一つの部屋で出した結論は
もはや海のなくなつた世界では
刺身の話題すら胸を締め付ける

最後に残された部屋の最後の三人は
架空の刺身を食べながら朝を待った
誰も知らなかつた夜の静寂の中で

最後に分かち合つた最後の虚無は
無数の涙で新しい海を作つた
誰も知ることのできない永遠の翌日

風船は膨らまず前から魂を持っていた
 この世に墮とされた日からずっと世界を
 熱望し続けていたらしいが
 輝かしいものばかりでないことを
 教えるべきかどうか迷った
 しかし私は手を放すときに
 黙ってはいられなかった

「鳥を見た。キャベツは死んだ。もう二度と落ちる夕陽がとけない
 海辺」

かつて私も風船だったのだ
 多くの空を飛んで行きつく先は
 宇宙に刻まれる光速のただ一点
 何も不思議なことはないままに
 砂に埋もれて滝から生まれ出る
 当然の幸福と悲哀と飲酒欲とチャンネル権争いの先に
 たまたま訪れた今日の日風に流される君

「憧れがついには歌を射殺した。霧の汽笛も鶴も知らない」
 「自意識の気根ばかりが首を絞め、それでも雲は土を拒んだ」
 「だがしかし」
 「君に出会った」

これからは
 時の礫を
 海辺に積まん

風船は飛んで行く

無責任 第二集

責任者 清水らくは(落波)
 副責任者 浮島
 イラスト 鈴山岬
 発行日 2014年5月1日
 発行 無責任. zone
 メール rakuha@hotmail.com